

ターリヒ・カルテットは半世紀以上にわたって一流演奏家としてその進化を続けており、世界中でチェコの音楽芸術を代表する存在です。

何十年もの間、ターリヒ・カルテットは世界でも特に優れた弦楽四重奏団のひとつとして、また、偉大なチェコ音楽の伝統を体現する存在として、国際的に認知されてきました。同カルテットはヤン・ターリヒ・シニアがプラハ音楽院在学中の1964年に設立。彼の叔父でチェコ・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者（1919～1939）として名を馳せたヴァーツラフ・ターリヒへの敬意をこめて名づけられました。

1990年代徐々に進んだ交代で完全にメンバーは入れ替わり、すっかり新しくなったカルテットですが、幅広い音楽活動とレコーディング活動によって先達の伝統を守り続けています。現在第1ヴァイオリンを務めるヤン・ターリヒ・ジュニアは創設者の子息です。

パブロ・カザルス音楽祭（プラード）、プラハの春音楽祭、ユーロパリア・フェスティバル、プランタン・デ・ザール（モンテカルロ）、ティボール・ヴァルガ音楽祭、オタワ国際弦楽四重奏フェスティバルなど、名だたる室内楽フェスティバルの常連で、マルタ芸術祭、クフモ室内楽フェスティバル（フィンランド）にも参加。

また、ニューヨークのカーネギー・ホール、パリのシャンゼリゼ劇場とサル・ガヴォー、ロンドンのウィグモア・ホール、アムステルダムのコンサートヘボウといった著名ホールでの演奏も続けています。

主なディスコグラフィとしては、2001～2004年にかけてカリオペからリリースされ広く称賛を集めたメンデルスゾーンの弦楽四重奏曲全集や、ドヴォルザークの弦楽四重奏曲《アメリカ》と弦楽五重奏曲第3番（2003年）、スメタナの2つの弦楽四重奏曲（2003年）、シューベルトの《死と乙女》とドヴォルザークの弦楽五重奏曲のライブ録音（2004年）などがあります。ヤナーチェクの弦楽四重奏曲はグラモフォン・アワード2006年室内楽部門最優秀録音に、弦楽四重奏団としては唯一ノミネートされました。

2015年5月にはドヴォルザーク弦楽四重奏曲第10番・第11番のCDがBBCミュージック・マガジンの五つ星を獲得。更に、フォーブス誌2014年12月号は、ヤナーチェクとシュルホフの弦楽四重奏曲の録音をクラシック音楽（再発版）部門の2014年第2位に選出。近年は、スメタナ、ドヴォルザーク、ヤナーチェク、カリヴォダ、フィビフ、シュルホフ、シューベルト、ブラームス、ドビュッシー、ラヴェル、ショスタコーヴィチなどを録音しています。

2018年にはヴィオラのヴラディミール・ブカチュが離脱し、その後任としてラディム・

セドミドゥブスキ（シュカンパ・カルテット、パヴェル・ハース・カルテットの元メンバー）が加わり、さらに2019年からはチェコを代表する世界的チェリストでプラハの春国際コンクール会長・同音楽祭芸術委員をも務めるミハル・カニユカが参加することとなり、より強固な体制を確立。欧米各国で活発な演奏活動を展開。2024年秋には創立60周年記念日本ツアーが予定されています。